

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23320162

研究課題名(和文) 帝国・国民国家の辺境と言語

研究課題名(英文) Languages in the borders of the empires and the nation-states

研究代表者

平田 雅博(Hirata, Masahiro)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：90181164

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,000,000円、(間接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近世・近代ヨーロッパにおける帝国・国民国家の「辺境」とされる地域における言語と共同体の関係の変遷について歴史的に検討することを目的とした。ここでは、「辺境」を支配と被支配の側の競合関係がより明確に現れる場ととらえ、その現われの一つである「言語」とその共同体との諸関係を検討した。具体的には、スペイン帝国、ハプスブルク君主国、プロイセン・ドイツ領ポーランド、アルザス、イギリス帝国とウェールズ、ケルト諸語を主な研究対象とし、これらの地域における支配-被支配関係から生じた言語変容を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research project intended to study the historical relationship between languages and communities in the 'borders' of the nation-states and the empires in early modern and modern Europe. We, members of this project, considered the 'borders' as the places where competitive problems between the rulers and the ruled emerged clearly. Therefore we paid special attention to language question as one of phenomena produced by the competition and to several relationships of languages with such communities. Actually we respectively dealt with historical changes of languages in the Spanish empire, the Hapsburg dynasty, Prussian and German Poland, the British empire, and the 'Celtic fringes' in Britain and France, including Wales and Brittany.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：西洋史

キーワード：言語政策 言語変容 イギリス フランス ケルト ドイツ オーストリア帝国 メキシコ

1. 研究開始当初の背景

帝国論と結びついて近年盛んに議論されているグローバルヒストリーでは、課題の中心が政治史・経済史であるのに対して、広い意味での文化に関してあまり議論されていない。これに対して、国民国家論では、言語を中心とした文化変容の問題は、中心的議論の一つとなっている。

このような断裂は、イギリス史の研究史においては、帝国史と国家史の間にあり、申請者はその相互の架橋を試みてきた(平田雅博「帝国史と国内史をつなぐ」『歴史学研究』776号(2003年6月)/ネイションと帝国、その分断と結びつき『比較文明』19号(2003年)/「古い帝国史と新しい帝国史」『二十世紀研究』5号(2004年)など)。本研究は、この試みの中から着想されたものであり、具体的な地域における言語と共同体の関係を検討することで、帝国論と国民国家論を架橋することに資すると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、近世・近代ヨーロッパにおける帝国・国民国家の「辺境」とされる地域における言語と共同体の関係の変遷について歴史的に検討を加えるものである。ここでは、「辺境」を支配と被支配の側の競合関係がより明確に現れる場ととらえ、その現われの一つである「言語」とその共同体との諸関係を検討する。

従来、政治・経済中心のグローバルヒストリーと国民国家論の文化史的視点が相互に交わることはあまりなかったが、本研究は、帝国および国民国家のそれぞれの「辺境」を扱い、比較検討することで、帝国および国民国家の研究史を架橋することを目的とする。

具体的には、スペイン帝国、ハプスブルク君主国、プロイセン・ドイツ領ポーランド、アルザス、イギリス帝国とウェールズ、ケルト諸語を主な研究対象とする。これらの地域における言語と共同体の変容を短期・長期的に検討し、支配・被支配関係における言語変容を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、「言語」を中心としながら、帝国・国民国家の「辺境」における事例を明らかにしていくものである。そのため、共同体と言語の総合的な把握を目的とすると同時に、研究分担者の個別研究は不可欠である。したがって、研究目的で述べた課題を達成するためには、研究者の個別研究を推進する必要がある。

他方で、これらの個別研究を通史的・課題的に総合的に把握し、研究者の問題意識・方法論的認識を共有化する必要がある。そのため、国内外の研究者・研究機関の協力を得て、研究会、ワークショップなどを行って連携をはかり、成果を公開する。

研究組織は、三つのグループに分ける。A

グループ「近世的帝国と言語」は、近世期の帝国の辺境における言語変容を明らかにする。Bグループ「国民国家における言語の複数性」は、19、20世紀の国民化の際の言語変容を分析する。Cグループ「「民衆の口語言語」対「支配者の文語」」は、文語伝統のない言語を支配者・被支配者側のそれぞれの観点から分析する。

4. 研究成果

本研究は、「言語」を中心としながら、帝国・国民国家の「辺境」における事例を明らかにしていくものであった。そのため、研究分担者の個別研究の進展を図ると同時に、それらの事例を総合することにつとめた。

(1) 個別研究の成果

個別研究は、各研究者が史料収集を行い、その研究成果を個別報告という形で研究会で報告した。研究期間中に行われた報告の一覧は以下の通りである。

西山暁義「ドイツ時代(1871-1918年)アルザス・ロレーヌ学校教育における「方言」」
割田聖史「保科孝一とドイツ領ポーランド」
佐々木洋子「トリエステの民族対立とイタリア・イレデンタ」

原聖「帝国周辺での文字誕生と規範化」
佐々木洋子「ハプスブルク帝国の「南スラヴ問題」とポーラ商業学校の設立請願」

安村直己「植民地支配・共同性・ジェンダーテキスト/モノとしての訴訟文書から」

西山暁義「国民国家知と帝国知 ドイツ国境地域、植民地における教育政策と日本 1900~1925」

平田雅博「ウェールズとブリテン帝国 北ウェールズと東アフリカの英語教育問題から」

川崎亜紀子「19世紀前半のアルザスユダヤ人における初等教育と言語」

割田聖史「ポーゼン州における言語」

川手圭一「マズール人の言語・宗教と「民族」意識」

このほかに、研究組織外部から、岡本真希子氏(津田塾大学)に「植民地官僚と現地語学習・通訳育成 台湾語学習雑誌『語苑』を中心として」と題する報告を依頼した。

これらの個別研究の結果、当面のところ、以下のことが考えられる。

帝国の「辺境」と位置付けられる地域、特に植民地とされる地域において、宗主国の言語を現地語に取り入れていく過程において、現地の人びとは単に抵抗だけでなく、現地の規範のなかに、帝國的規範を取り込んでいくということが明らかとなった。

国民国家の「辺境」と位置付けられる地域において、「中央」もしくは「多数派」の言語が注入されていく手段として学校教育が利用された。しかし同時に、学校における言語(言語教育)は、「少数派」もしくは「辺境」側の言語を広める手段または防衛の手段ともなるのであり、その制度・思想的側面を

詳細を深める必要がある。

帝国であれ、国民国家であれ、「辺境」「周辺」の言語は、「中央」との言語との間に、何らかの差異が見出されていた。「辺境」「周辺」の言語は、「中央」からの逸脱なのか、もしくは、まったく新しい別のものなのか、それとも「中央」の言語に至る過渡的段階のものなのか、といった言語の差異に関する認識があり、この差異の認識そのものに検討が加えられるべきである。

なお、この成果の一部は、『青山史学』31号(2013年)の特集「帝国・国民国家の辺境と言語」に発表されている。

(2) 海外研究者との交流による成果

また、本研究は海外から研究者を招聘し、ワークショップおよび講演会を行うことで、視野を広げることをもう一つの目的としていた。

そこで、トマス・カムセラ (Tomasz Kamusella) 氏による公開研究会 (The Cultural and Social History of the Silesian Language) およびワークショップ (Language and Nationalism of Modern Central Europe)、ジャン=フランソワ・シャネ氏「19-20世紀にフランスにおける言語、学校、国民」を開催した。この成果の一部は、『青山史学』31号(2013年)の特集「帝国・国民国家の辺境と言語」に発表されている。また、2012年度には、ピーター・パーク氏を招聘し、「近世ヨーロッパ支配階層の多言語性」(Diglossia in Early Modern Europe)と題した講演会を開催した。この成果の一部は、『思想』1074号(ピーター・パークの仕事：文化史研究の現在)(2013年10月)に発表されている。

2013年度には、J.M.マッケンジー氏を招聘し、東京および長崎で計三回の講演会を行った。論題は以下の通り。「The Four Nations: England, Ireland, Scotland, Wales and the British Empire」, 「The 'Studies in Imperialism' Series: Thirty Years and 110 Books, a Revolution in British Imperial History」, 「A Tale of Two Cities - Nagasaki and Aberdeen: the Scots Overseas - the background to Thomas Blake Glover and treaty ports in China and Japan」。これらについては、今後翻訳・発表を予定している。

この他に、台湾におけるワークショップにおいて、陳培豊氏より、植民地漢文を事例に、漢字文化圏における言語の変容についての報告をいただいた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計20件)

川手圭一「紹介・翻訳 H.ロートフェルスの「国民国家」観と中東欧の「ナチオナリテート(Nationalitat)」の問題」『史海』61号(東京学芸大学史学会、2014年5月発行

予定) 査読無

割田聖史「プロイセン議会成立期(1849年1850年)におけるポーゼン問題」『青山史学』32号、2014年1月、19-37頁、査読無

平田雅博「ブリテン帝国への四ネーションアプローチ 研究視角と研究動向」青山学院大学文学部『紀要』、第55号、2014年、41-61頁、査読無

安村直己「植民地支配・共同性・ジェンダー：18世紀メキシコの訴訟文書をめぐって」『歴史学研究』912号、2013年11月、査読無

[翻訳]ピーター・パーク「文化史を探究する」原聖訳『思想』1074号、2013年10月、21-35頁

[翻訳]ピーター・パーク「近世ヨーロッパ支配階層の多言語性」原聖訳『思想』1074号、2013年10月、71-84頁

平田雅博「さまざまな「転回」の中で 帝国史・世界システム論・オリエンタリズムの「名著」「名論文」」『歴史評論』、第757号、2013年5月、56-61頁、査読有

佐々木洋子「コスモポリタニズムの終焉 トリエステにおける民族分化とイレデンティズム」『青山史学』31号、2013年3月、149-166頁、査読無

[翻訳]ジャン=フランソワ・シャネ(西山暁義・平田雅博解題、西山暁義訳)「1789年革命から現在までのフランスにおける言語、学校、国民」『青山史学』31号、2013年3月、103-126頁、査読無

[翻訳]トマシュ・カムセラ「中央ヨーロッパの歴史と政治における言語」割田聖史訳『青山史学』31号、2013年3月、127-148頁、査読無

割田聖史「ビスマルクとミツケヴィチポズナンの記念碑と記憶」『人文社会科学論叢』22号、2013年3月、15-33頁、査読無。

平田雅博「1950年代英領アフリカにおける英語教育問題 - グローバリゼーションの中の言語」渡辺昭一編『ヨーロッパ・グローバリゼーションの歴史的位相 - 「自己」と「他者」の関係史』、『アジア遊学』165号、2013年、214-224頁、査読無

Akiyoshi Nishiyama, Chemin de la mémoire de guerre au Japon au XXe siècle. Une perspective comparative, 『国立国際研究』30(2013年)、査読無

西山暁義「二国間教科書の可能性と限界 独仏共通歴史教科書の事例から」『歴史学研究』899、2012年11月、52-59頁、査読あり

佐々木洋子「トリエステにおける「共存」：19世紀ハプスブルク帝国の辺境におけるコスモポリタニズム」『青山史学』30号、2012年3月、43-58頁、査読無

割田聖史「ルール・ポーランド人研究の現在と課題：伊藤定良著『異郷と故郷：ドイツ帝国主義とルール・ポーランド人』によせて」『青山史学』30号、2012年3月、11-26

頁、査読無

川手圭一「第一次世界大戦後の東プロイセンにおける民族的相克：ドイツ人とポーランド人の関係をめぐって」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系』163、2012年1月、73-86頁、査読無

平田雅博「英語のグローバルヒストリー構想—アンダーソン「想像の共同体」再読から」『青山史学』第30号、2012年、21-39頁、査読無

西山暁義「世紀転換期ストラスブールの都市初等教育政策（1902-1918年）」『教育都市』の可能性と限界』『共立国際研究』28号、2011年、39-68頁、査読無

川崎亜紀子「「フランコ・ジュダイズム」の再検討—近代フランス・ユダヤ史研究をめぐる一考察」、『歴史と地理』649、2011年11月、58-62頁

〔学会発表〕(計5件)

Akiyoshi Nishiyama, Dialect in the School of Imperial Germany. The Case of Alsace, Research Seminar, Institute for Transnational History, University of St. Andrews, 2014年3月5日

川崎亜紀子「19世紀アルザスユダヤ人における教育と「再生」」、『歴史と人間』研究会2014年2月16日、一橋大学

割田聖史「地域から地方へ—1848年革命直後のポーゼン州をめぐる議論から」、『歴史と人間』研究会、現代史研究会シンポジウム、2013年12月15日、一橋大学

川崎亜紀子「19世紀前半のアルザスユダヤ人における初等教育」、『日本ユダヤ学会』、2013年10月26日、早稲田大学

安村直己「Tres momentos del proceso de civilización en el Bajío: reconsideraciones sobre la continuidad y la ruptura en el pueblo de indios de Numarán」(「植民地期メキシコ、バヒオ地方における文明化過程の三局面：ヌマラン村における連続性と断絶に関する再検討」)、日本ラテンアメリカ学会大会シンポジウム、2011年6月5日、上智大学

〔図書〕(計12件)

Akiyoshi Nishiyama, Erziehungsstadt statt Erziehungsstaat? Die liberale Schulreform der Stadt Strassburg vor 1914, in: Detlef Lehnert (Hrsg.), Kommunaler Liberalismus in Europa: Grossstadtprofile um 1900 (Böhlau, 2014), 315 (225-255)

川崎亜紀子「アルザスユダヤ人再考—セル・ベールの活動を中心に」、『谷澤毅他編『地域と越境—「共生」の社会経済史』(春風社、2014年)、(52-80頁)

安村直己「スペイン帝国とネイション形成：植民地期メキシコ先住民の経験を中心に」、『渡辺節夫編『近代国家の形成とエスニシティ』(勁草書房、2014年)、319頁(110-129頁)

安村直己「第7章—スペイン領アメリカ植

民地から見た18世紀：繁栄の光と影」網野徹哉・橋川健竜編『南北アメリカの歴史』(NHK出版、2014年)

佐々木洋子「第III部第11章—トリエステにおける民族分化—超民族都市から民族対立の舞台へ」弘末雅士編、『越境者の世界史—奴隷・移住者・混血者』(春風舎、2013年)、310頁(235-250頁)

佐々木洋子『ハプスブルク帝国の鉄道と汽船—19世紀の鉄道建設と河川・海運航行』(刀水書房、2013年)、233頁

ロバート・フィリップソン著、平田雅博、原聖ほか訳『言語帝国主義—英語支配と英語教育』(三元社、2013年)、403頁

D.アーミテイジ著、平田雅博ほか訳、『独立宣言の世界史』(ミネルヴァ書房、2012)、295頁

安村直己「スペイン帝国と文書行政—植民地期メキシコにおける文書行政ネットワークとその外部」、『近世・近代における文書行政—その比較的研究』(有志舎、2012年)、241頁(70-107頁)

〔共訳書〕J.-J.ベッケール、G.クルマイヒ(剣持久木・西山暁義訳)『仏独共同通史—第一次世界大戦』(上下)(岩波書店、2012年)、2冊

割田聖史『プロイセンの国家・国民・地域—19世紀前半のポーゼン州・ドイツ・ポーランド』(有志舎、2012年)、382頁

松尾精文・佐藤泉・平田雅博編著『戦争記憶の継承—語りなおす現場から』(社会評論社、2011年)383頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平田 雅博 (Hitara, Masahiro)
青山学院大学・文学部・教授
研究者番号：90181164

(2) 研究分担者

原 聖 (Hara, Kiyoshi)
女子美術大学・芸術学部・教授
研究者番号：20180995

川手 圭一 (Kawate, Keiichi)
東京学芸大学・文学部・教授
研究者番号：50272620

佐々木 洋子 (Sasaki, Yoko)
帯広畜産大学・人間科学研究部門・准教授
研究者番号：30332480

安村 直己 (Yasumura, Naoki)
青山学院大学・文学部・教授
研究者番号：30239777

西山 暁義 (Nishiyama, Akiyoshi)
共立女子大学・国際学部・准教授
研究者番号：80348606

川崎 亜紀子 (Kawasaki, Akiko)
東海大学・文学部・准教授
研究者番号：00350398

割田 聖史 (Warita, Satoshi)
青山学院大学・文学部・准教授
研究者番号：20438568

(3) 連携研究者

()

研究者番号：